２０１５年度　　ソニー幼児教育支援プログラム
―科学する心を育てる―

# ＜子ども自ら遊びを創る＞

## ～“もっとおもしろく”につながる　保育者のかかわりとは～

３歳児　「はだし！」

４歳児　「ダンゴムシって、こしょばい！」

５歳児　いかだプロジェクト

奈良市立都跡こども園

# 目　次

１．　はじめに　・・・・・1

２．　「科学する心」についての考え方と取組のテーマ　・・・・・1
表１　・・・・2、3

３．　実践事例
「３歳児」
事例１　あれ、増えないね　・・・・・4
事例２　はだし！　・・・・・5
事例３　おさんぽ行くのかな　・・・・・6
事例４　葉っぱってイチゴになるんだね　・・・・・6
事例５　トマトにお水あげたい　・・・・・7
事例６　お山でケーキができた　・・・・・7

「４歳児」
事例１　泥だんご固いよ！　・・・・・9
事例２　お部屋でダンゴムシを飼いたい！　・・・・・10

「５歳児」
事例１　光る泥だんごづくりに挑戦　・・・・・14
事例２　フルーチェの泡と納豆の泡　・・・・・15
事例３　いかだプロジェクト　・・・・・16

４．　まとめと課題　・・・・・20

## 1　はじめに

本園は、「子ども自ら遊びを創る」を研究テーマとして、子どもが主体的にひと・もの・ことにかかわり、「こうしたい」という思いを持って遊び込む中で、主体性と創造的な思考力を培う保育の研究を始めて３年目になる。

本園は昨年、幼稚園型認定こども園として認定を受け、本年度は幼保連携型認定こども園に移行し、奈良市立都跡こども園と改称し、３、４、５歳児１５１名が在園している。本園では、子どもたちの発想を大切にし、発想を否定したり行動をできるだけ禁止をしたりしないで、子どもたち自身、自分が楽しいと思ったことができるような環境構成を心がけ、子どもたちだけでなく保育者も「もっとおもしろくしたい！」「いいこと考えた！」と、心を動かしながら本気で遊んでいる。その中で、子どもが主体的に“ひと・もの・こと”にかかわり試行錯誤して遊ぶことが「科学する心」にどのようにつながるかを見つめてきた。

## 2「科学する心」についての考え方と取組のテーマ

子どもは、興味を持ったことに繰り返し取り組む中で、“おもしろい”“すごい”“不思議”“どうしてだろう”という気持ちを持ち、試行錯誤しながら遊びを創りだしていく。その過程において、“発見！”“うまくいった”“だめだった”“どうしたらうまくいくだろう”“悔しい　もう一度”“今度こそ”“わかった”“こうしようか”という様々な感情体験をする。これが大事であり、この体験こそが「科学する心」と、捉え、「子ども自ら遊びを創る」ことであると考える。

昨年の実践より子どもが環境・出来事・人との関係を結ぶ保育者のかかわり方が子どもたちの「科学する心」を育むことにつながることに気付いた。日々、保育終了後、子どもたちの遊びの様子の写真を見て、保育者同士が「〇〇を置いておいたら、子どもがこんな発見をしたんですよ」「子どもってすごいね」「あの時、私、ちょっと先走って言葉をかけてしまったかな」「きのうの続きをすると思ってたら、違う遊びが始まって…　きのうあんなに盛り上がってたのにどうしてかな」というように、子どもたちの遊びの姿や保育者のかかわりについての話が始まる。写真を見て、他の保育者も自分なりに思ったことを話したり、自分だったらこうするという意見を出したりして話がヒートアップしてくる。話し合うことが、明日の保育を前向きに思い描くことにつながる。

そこで、本年度は“もっとおもしろくするための保育者のかかわりとは”と、保育者の環境構成や援助に視点を当てて取り組み、子どもたちの姿を丁寧に読み取り、「科学する心」を育むことにつながる保育者のかかわりを考えてみることにした。その手立てとして、保育者は子どもの遊ぶ様子から「科学する心」につながる姿を丁寧に読み取り、子どもに“こんなことを経験してほしい”という意図を明確にし、環境構成や援助をするということを重点課題として取り組んだ。

こうした取り組みの結果、次のようなことが明らかになった。（表１）

| | 子どもの姿の捉え | 環境構成 |
|---|---|---|
| 3歳児 | ・偶然見つけた虫や植物を見て、自分なりの言葉で発見や感動したことを表現する。<br>・自分の発見を身近な人に伝える。<br>・水や砂、土、泡などの素材の変化に、遊びの中で偶然気付き、繰り返し楽しむ。 | ・子どもにとって身近な虫や植物を、子どもの目に付きやすい場所に置いておく。<br>・虫や植物への関心が高まるように、写真を掲示したり、絵本を置いておいたりする。<br>・変化のわかりやすい素材（水や砂、土、泡など）と自然にかかわれるような場所や道具を用意する。<br>・一人一人が遊びを繰り返し楽しめるように、素材や道具を十分に用意しておく。 |
| 4歳児 | ・感触や見た目など、気付いたことや感じたことを自分の言葉で表現し、友達と伝え合う。<br>・他児や異年齢児の姿を見て興味を持って遊ぼうとする。<br>・自分たちで考えたことを行動にうつし、繰り返し取り組む。 | ・実物や絵本など、興味を持っているものを子どもたちの身近に掲示し、見たり触れたりできるようにする。<br>・一人一人の気付きや思いを、伝えられる時間をつくり、クラスで共有できるようにする。<br>・翌日も繰り返し遊べるように、同じ環境をつくる。 |
| 5歳児 | ・「こうなるだろう」<br>（予測を立てて遊びだす）<br>・「あれ？」「どうして？」<br>（予想通りにいかず、不思議に感じる）<br>・「こうしてみよう！」<br>（いろんな方法を試す）<br>・「こんどこそ！」<br>（繰り返しやってみる）<br>・「わかった！」<br>（新たな発見をする）<br>・「あしたもつづきをしよう」<br>（継続して取り組む）<br>・「どう思う？」<br>「ぼくのかんがえはね…」<br>（自分の考えを相手に伝えたり、相手の考えを取り入れたりして遊ぶ） | ・没頭して遊べるように、じっくりと取り組める時間や場を確保する。<br>・試したり工夫したりできるように、素材を存分に使えるようにする。<br>・子どもの意欲や関心が高まるように、掲示物を工夫する。<br>・翌日も遊びが継続できるように、遊びの場をそのままにしておく。<br>・一人一人の気付きや考えを共有できるように話し合いの機会を持つ。 |

| | | 保育者の援助 | | |
|---|---|---|---|---|
| | | 見守る | 認める・共感する | 提案する |
| 3歳児 | 保育者の意図 | ・保育者が近くにいることで、安定して遊んでほしい。<br>・子どもが面白いと感じたことを、繰り返し楽しんでほしい。 | ・子ども一人一人が不思議と感じたことや、面白いと感じたことを、思いのままに表現してほしい。<br>・自分の発見したことを、身近な人に伝えながら、興味や関心を高めてほしい。<br>・子どもの発見を保育者が一緒に楽しむことで、うれしさを感じ、意欲を持って遊んでほしい。 | ・保育者も一緒に遊ぶことで、安心して素材にかかわり、感触や変化を楽しんでほしい。 |
| 4歳児 | | ・子どもたち自身が考えて、繰り返し取り組んでほしい。<br>・友達とのかかわりを広げてほしい。<br>・素材に触れて存分に遊んでほしい。<br>・積極的に自分の興味のある遊びに取り組んでほしい。 | ・「もっとしたい！」という気持ちを持ってほしい。<br>・保育者も一緒に遊ぶことで、気付いたことの面白さや楽しさを感じてほしい。<br>・思いを伝えられる楽しさや聞いてもらえるうれしさを感じて自信を持ってほしい。<br>・自分の遊びの中で、満足感を味わってほしい。 | ・一人一人が考えたことをクラスで共有できるようにする。<br>・いろいろ感じたり考えたりしながら、根気よく遊んでほしい。<br>・繰り返し取り組む楽しさを感じながら、展開していってほしい。 |
| 5歳児 | | ・友達同士で考えを出し合って遊びを進めてほしい。<br>・一人一人の主体性や意欲を大切にしたい。 | ・子どもの発想を大切にし、それを実現しようとする意欲を認めたい。<br>・話し合いを通して、一人一人の気付きや考えをクラスのみんなで共有したい。 | ・新しい素材を知らせたい。<br>・素材の特性や違いに気付いてほしい。<br>・遊びに次の展開が広がるようにしたい。<br>・子どもの思いを聞き大切にしながら、一緒に遊びを進めていきたい。 |

表１

# ３歳児

３．実践事例

保育者の援助（見守る援助　認める・共感する援助　提案する援助）　環境構成　保育者の意図

**事例１　あれ、増えないね**　６月

あらかじめ泡立てた泡を入れたタライ、石鹸、洗面器、ペットボトル容器、机を置いておいた。また泡や道具は十分に用意しておいた。泡を初めて用意しておいた日、泡を触って「ふわふわ」「手が白くなった」と感触を楽しんだ。

次の日は、カップやペットボトル容器に泡を入れたり、ごちそうづくりをしたりして楽しむ姿があった。保育者は近くで見守ったり一緒に触ったりしながら、子どもの発言を頷きながら聞いていた。A 児を含む数人の子どもが、泡の入ったタライにペットボトル容器を沈め、泡を中に入れようとしていた。泡はうまく入らず、下の石鹸水だけが入り、「白くなった」「カルピスみたい」「カルピスです、どうぞー」と保育者に見せたり渡したりして遊んでいた。保育者は「本当だね」「おいしそう！」と一人一人の表現を受け止め、共感した。

B 児が、そのペットボトルを振ると、石鹸水が泡立ち「泡が出てきた！」「先生見て、あわあわになった！」と見せに来た。保育者が真似をして振ると、それを見ていた A 児も真剣な顔で黙々と振り出し、泡立つと、保育者に見せた。保育者は「いっぱいになったね」と笑顔で受け止めた。

環境構成
・泡に思う存分かかわって遊んでほしい。
・一人一人が繰り返し楽しめるようにしたい。

見守る
保育者が近くにいることで安定して泡とかかわって遊び、繰り返し楽しんでほしい。

認める・共感する
自分の感じたことを思いのままに表現してほしい。

認める・共感する
子どもの発見を保育者が真似て一緒に楽しむことで、うれしさを感じ、意欲を持って遊んでほしい。

ペットボトル容器に入れた水をトイに流し入れることを楽しんでいる姿があったので、泥を入れるタライと水を入れたタライを砂場の近くに置き、タライとタライの間にトイを置いた。水を汲みやすいように、近くにペットボトル容器やスコップ、じょうご、バケツを用意しておいた。

砂や水を入れたタライ２つをトイでつないで、水を流すことを繰り返し遊んでいた。しばらくしてから、A 児がペットボトル容器に泥水を入れようとしていた。しかしタライに水が少なく、ペットボトル容器を沈めても半分ほどしか入らなかった。すると、A 児は思い出したようにペットボトルのふたを閉め、振りだした。そして首を傾げ、「あれ？振っても増えないね」とつぶやいた。保育者が「増えない？」と A 児の言葉を繰り返して聞くと、「あの、泡は増えたのに、これは増えない」と不思議そうにペットボトルを見つめていた。保育者も一緒に泥水をペットボトルに入れて振り「本当だね、この前はあわあわいっぱいになったのに、これはいっぱいにならないね」と言うと A 児は頷き、少しの間、真剣な顔で力を入れてペットボトルを振っていた。保育者も一緒に泥水の入ったペットボトルを力一杯振った。

環境構成
トイに水を流すことを引き続き、繰り返し楽しめるようにしたい。

認める・共感する
A 児の言葉を受け止めることで、発見したことを保育者に伝えながら、より興味や関心を高めてほしい。

認める・共感する
保育者が A 児の発見を受け止め一緒に体験し、楽しむことで、意欲を持って遊んでほしい。

【考察】

A 児はペットボトル容器という同じ素材を通して、以前石鹸水を入れて振ったときのことを思い出した。同じように泥水を増やそうとペットボトル容器に入れた泥水を振ったが、予想に反する結果に不思議さを感じていた。保育者が、泡の時のことを思い出して不思議さを感じている A 児の思いを受け止めたことや、一緒に真似をして共感したことで、A 児の興味や関心が高まり、繰り返し試す意欲につながった。

**事例２　「はだし！」**　７月

前日に子どもたちが砂場に水をためて川をつくって遊んでいたので、水を運び入れやすいように水をたっぷり入れたタライや、ペットボトル容器やバケツを砂場の近くに置いておいた。A 児が砂場の縁に座り、砂場の中にできた水たまり（他児が水を運び入れた）に手をつけたり、靴を履いたまま足を付けたり、砂を少し上から落としたりして遊んでいた。

保育者がそれを見て、一緒に手をつけたり砂を落としたりすると、A 児は保育者の方をちらっと見て少し微笑み、また続けた。保育者が「裸足になる？」と A 児に声を掛けると、A 児は頷き、保育者と一緒に靴と靴下を脱いだ。一緒に砂場の中の水たまりに足を付け、保育者が足踏みをしてみると、A 児は笑顔で保育者の顔を見て何度か足踏みをしたり、手で泥をすくったりしていた。

保育者と A 児が裸足で砂場の中に入ったのを見て、他の子どもたちも次々と「私もやりたい」「靴脱いでもいい？」とやってきた。保育者が「いいよ」と言うと、それぞれ裸足になり、そっと水たまりの中に足を踏み入れた。すると子どもたちは「きゃー！」「冷たいね」「気持ちいい」と言いながら、砂場の中を歩きだした。

保育者が足を泥水の中に入れて「わぁ！足が見えなくなっちゃった」と言うと、B 児と C 児はそれを見て笑い、「私もー！」「見て見て、見えなくなったよ」と喜んで保育者や他の子どもたちに見せていた。泥水の中でしばらく遊んでいると、一度保育室に戻っていたが一緒にしたくなって出てくる子どもや、裸足にはならないが砂場に水を運ぶ子、見て笑っている子もいた。

A 児は、砂場の中に子どもが増えてくると、砂場から出て、園庭を裸足で歩きだした。初めて園庭で裸足になり、うれしかったのか、すれ違う子どもに「はだし！」「A はだしなの！」と見せて歩いていた。

次の日も「昨日のあれやりたい」「砂場の楽しかったなぁ！」「今日も靴脱ぎたい」と裸足になって遊ぶことを楽しみにしていた。その後も暑い日には裸足になり、砂場やタライ、泡の中に足を入れて、感触や温度の違いを「なんかあったかい」「温泉みたい」「じゃりじゃりしてる」と表現していた。保育者も一緒に裸足になって砂場やタライの中に足を入れ、「わぁ本当だね」「あっちの水よりあったかいね！」と一人一人の表現に共感し、受け止めた。

**環境構成**

・砂や水と思う存分かかわって遊んでほしい。
・引き続き川づくりを楽しんで、砂や水に親しんでほしい。

**認める・共感する**

保育者が A 児の近くに座って寄り添い、共感することで、保育者に親しみを持って遊んでほしい。

**提案する**

泥や水の感触を十分に味わってほしい。
保育者が積極的に裸足になることで、安心して裸足になり、安心して泥や裸足での感触を味わったり素材の変化にかかわったりしてほしい。

**提案する**

保育者も一緒に遊ぶことで、安心して泥水にかかわり、感触や変化を楽しんでほしい。

**認める・共感する**

泥水に入って一人一人が感じたことや発見したことを、思いのままに表現してほしい。

【考察】

・保育者が A 児の姿から裸足になることを提案し、一緒に遊ぶことで、裸足になる気持ちよさや、直接触れる泥の感触を楽しむことができた。また保育者が一緒に楽しんでいたことが、他の子どもたちが入るきっかけになったと考えられる。
・保育者が一人一人の表現に共感したり受け止めたりしたことで、感触を存分に味わうことができ、温度や感触など、次の気付きや意欲につながった。

## 事例3 「おさんぽ行くのかな」 ５月

園庭にいるダンゴムシを夢中で探す子どもの姿があったので、**ダンゴムシをタライに入れて保育室の前に置いておいた。**

ダンゴムシが入っているタライを囲んで、中を覗き込む子どもたち。土の中を歩き回るダンゴムシを手の平に乗せて「くすぐったい」「歩いてる」と感触や動きを楽しむ姿や「ちっちゃい」「大きい」「これはあかちゃん」「こっちはお父さん」と大きさを比べて表現する。**保育者は「ほんとだね」「どこに行くのかな」と子どもの言葉を受け止め問い返す**と「おさんぽかな」「おかいもの行くんじゃない？」と想像を膨らませながら保育者に伝える。

また、**タライの近くにダンゴムシの写真が大きく載っている図鑑や絵本「ころちゃんはだんごむし」を置いておく**と「一緒だね」「足がいっぱい」と、図鑑や絵本とダンゴムシを見比べる姿があった。その後も、園庭でダンゴムシを探し見つけては、動く様子や形、色、ダンゴムシの住んでいる場所などに興味を示す子どもたちの姿が見られた。

**環境構成**

より身近な場所でダンゴムシを見てほしい。

**認める・共感する**

・ダンゴムシへの関心をさらに高めてほしい。
・気付いたことや感じたことを、自分の言葉で表現する楽しさを感じてほしい。

**環境構成**

写真や絵本を見ることで、ダンゴムシに親しみを感じてほしい。

【考察】
・子どもたちが夢中で探していたダンゴムシのタライを保育室の近くに置いておくことで、より身近な場所でダンゴムシに興味を持ち、見たり触ったりすることができ、ダンゴムシに親しみを感じることにつながった。
・ダンゴムシが動いている様子や色、大きさ等、感じたことを口々に話す子どもの言葉を、保育者が近くで受け止めて返したことで、より興味を持ってダンゴムシを見る子どもの姿につながった。
・ダンゴムシの様子を、保育者が問いかけることにより、子どもたちは自分の生活に重ね、擬人化して表現し、想像力を働かせていた。

## 事例4 「葉っぱってイチゴになるんだね」 ５月

いつものように、プランターや切株の下にダンゴムシがいないか探していたＡ児。偶然プランターを見るとイチゴが赤くなっている。「うわあ、イチゴだ」と赤くなったイチゴを見て感動する。「イチゴができてるよ」と保育者に伝えに行く。保育者は、**「わあ、イチゴができたんだね、美味しそう」「Ａちゃんが見つけたの？」とＡ児の発見や驚きに共感する。**保育者と一緒にイチゴを見ながら「いい匂いがする」「これはちっちゃくて緑」と、イチゴを触ったり匂いを嗅いだりしていた。保育者は**「いい匂いだね」とＡ児の言葉に共感しながら、そばで見守った。**

Ａ児は、赤いイチゴを触り「葉っぱってイチゴになるんだね」と感動を噛みしめながらつぶやく。保育者は「本当だね」と頷きＡ児の思いを笑顔で受け止めた。

**認める・共感する**

イチゴがなっていることを見つけた喜びを感じてほしい。

**見守る**

匂いや色、固さなど、気付いたことや感じたことをＡ児なりに表現してほしい。

**認める・共感する**

イチゴができていることを発見した喜びをじっくり味わってほしい。

【考察】
・偶然見つけたイチゴだったが、保育者が感動を共有し、Ａ児のそばにいたことで、見たり触ったり匂いを嗅いだりと、じっくりとイチゴとかかわり自分が感じたことを思いのままに表現することができた。

## 事例5「トマトにお水あげたい」 ７月

クラスで育てているミニトマトのプランターを、保育室前の子どもの目につきやすい場所に置いておく。

体調を崩して１０日程休んでいたＡ児。登園後、戸外へ出るが気分が乗らず、遊び始めた友達や保育者をじっと見つめて立ちつくしている。保育者の言葉がけにも答えようとしない。

何かを見つけたＡ児は「ねえ先生、来て」と、ミニトマトのプランターの前に保育者を連れて行く。「トマトが赤くなったんだよ」「ほら、これは緑だけど」「こっちにもできてる」と、１０日前よりもたくさんなっているミニトマト、色付いたミニトマトをうれしそうに保育者に見せる。保育者は**「わあ、本当だ」「赤くなっているね」「たくさんなっているね」と、Ａ児の発見に驚いたり共感したりして、Ａ児の伝えたい気持ちを受け止める。**

Ａ児は「お水あげたい」といってジョウロを持ってくる。「トマトよろこんでる」「こっちにもあげたい」と言いながら、ミニトマトの実に直接水をかける。保育者は**「本当だね、よろこんでるね」「いっぱいあげてね」と、Ａ児の気持ちが安定するよう、Ａ児の言葉を繰り返しながら見守る。**Ａ児は笑顔で「こっちにも、こっちにも」と言いながら、水をかけていない実を選んで、ジョウロの水をかけた。

**環境構成**

ミニトマトの生長に気付いたり、大切にしたりしてほしい。

**認める・共感する**

休み前は、少なくて緑だったミニトマトの実が赤くなったことを見つけた喜びを存分に味わってほしい。

**見守る**

ミニトマトの実に夢中で水をやる姿を受け止め見守ることで、Ａ児の気持ちが安定し、意欲的に活動を続けてほしい。

【考察】

１０日ぶりの登園で、なかなか遊び出せなかったＡ児だったが、プランターを目の付きやすい場所に置いたことにより、ミニトマトの実がたくさんなっていることや赤くなっていることに気付き、その感動を保育者に伝えた。保育者がＡ児の気づきや感動を受け止めたことが、ミニトマトに水やりをしたいという意欲的な姿につながったと思われる。子どもが伝えたいと思った時に、子どもの思いを受け止めることができる保育者の存在が大切である。

## 事例6「お山でケーキができた」 ７月

いろいろな形の砂型やカップなどの用具を、園庭にたくさん用意しておく。

湿った砂で型押しが偶然うまくいったＢ児は「先生、見てて」と言って、カップに砂を入れて机の上にひっくり返すが形ができない。「あれ？」「もう一回」と言ってもう一度挑戦する。カップの中に砂を半分ほど入れてもう一度ひっくり返すが、思ったような形ができない。保育者は**「あれ？」「今度はどうかな？」と、Ｂ児が何度も繰り返して型押しをする様子を見守る。**何度も繰り返す中で偶然、砂をたくさん入れてひっくり返すとうまくいき「ケーキできた」と笑顔になった。保育者は**「やったね、大成功！」「美味しそうなケーキだね」「砂をいっぱい入れたらできたね」と、うまくいったことを、Ｂ児と一緒に喜ぶ。**

コツをつかんだＢ児は、「今度はお山で」と山の斜面に型押しをしてみる。「ほら、落ちない」と、うれしそうに保育者の顔を見る。**山の斜面に型押しをしても落ちないというＢ児の発見に、「ほんとだね」「不思議！」と驚き共感する**と、Ｂ児は新たな発見を何度も楽しんだ。

**環境構成**

雨上がりの園庭で、遊びを存分に楽しんでほしい。

**見守る**

Ｂ児が思っている形になった時の喜びを味わってほしい。

**認める・共感する**

思ったようにできた喜びを感じ、さらに意欲を持って遊んでほしい。

**認める・共感する**

「すごい」「不思議！」と思ったことを繰り返し楽しんでほしい。

【考察】

・偶然うまくいった型押しを、保育者に見せようとしたＢ児だった。保育者がそばで見守ったり励ましたりしたことで、何度も挑戦し、思った形になった喜びを味わうことができた。

・Ｂ児が繰り返し遊ぶ姿を、保育者が見守りながらじっくりとかかわったことや成功感を味わったことが意欲となり、斜面でも崩れない湿った土の性質に気づくというさらなる発見につながった。

# ４歳児

**事例１「泥だんご固いよ！」** ５～７月

５歳児が泥だんごをつくっているのに興味を持ったので、**４歳児も泥だんごづくりができるよう、地面をドロドロにしておいた。子どもたちは５歳児がつくる様子をよく見て、真似をしながら泥だんごをつくり始めた。**

「ここの泥がよさそう！」と築山や砂場のそばなど、その日の泥の状態を友達同士で確かめながら、いい場所を探し、泥をすくって、ぎゅっぎゅっと力を入れて丸めて泥だんごをつくっている。**その様子を保育者は横で見守った。**
**Ⓣ「べちゃべちゃできもちいいね」A 児「きもちいい！」B 児「見て！手が泥だらけになった！」C 児「丸くなってきた」などと言いながら、保育者も一緒に泥だんごをつくった。**

それができると、「よし！砂かけに行こう」と言って、以前発見した階段下のサラ砂のところに行き、「ここの砂かけたらめっちゃカチカチになるねん」「これは魔法の砂やで」と言いながら、白くてとてもきめ細やかなサラ砂を何度も何度もかけた。
A 児「魔法の砂をかけたらめっちゃ固くなった！」**Ⓣ「本当に魔法みたいに固くなるね！」「みんなにも教えてあげようよ」**A 児「じゃあ、D ちゃんにも教えてあげる！」と向こうで泥だんごをつくっている友達に教えに行った。
B 児「先生見て！僕の泥だんごめっちゃ固いで。触ってみて」と言って次々に見せに来た。**Ⓣ「すごいね！本当にカチカチだね！！」「みんな泥だんご名人だね！」と声を掛けると、**とてもうれしそうに、他の友達や保育者にも見せに行った。
そして、**できた泥だんごは棚に置いておき、**また次の泥だんごをつくり始めた。

**環境構成**
・５歳児の遊びの様子が見られるように、同じ場で遊べるようにした。
・泥の感触を存分に楽しんでほしい。

**見守る**
泥だんごに適した泥を自分たちで考えて探してほしい。

**認める・共感する**
子どもたちに泥だんごの感触を楽しんでほしい。

**認める・共感する**
子どもたちの発見を共に喜び、子どもたちが満足感を感じられるようにする。

**提案する**
他の子どもたちにも魔法の砂をかけると固くなるということを共有できるようにしたい。

**認める・共感する**
子どもたちの自信につなげられるようにしたい。

**環境構成**
何度も繰り返し泥だんごをつくることができるようにした。

【考察】
・去年からの経験と、５歳児の様子をそばで見ることができるという環境があったため、自分たちで考え、いろいろな場所で適当な泥や、魔法の砂を見つけることができるようになった。
・つくった泥だんごを保育者に見てもらい、認めてもらうことで、もっとつくりたいという意欲が高まったようである。

～数日後～
引き続き、泥だんごづくりは続いていた。ある日、築山でA児、B児、C児が何度も固い泥だんごをつくっていた。**Ⓣ「今日も固い泥だんごたくさんつくったね！」と声を掛けた。**すると、A 児ができた泥だんごを地面に落としてしまい、下まで転がったが割れていないことに気付き、「よかった！割れてない！」と安心していた。そこで、また泥だんごを築山の上に持っていき、「先生見てて！」と言って上から転がし始めた。「転がった！割れてないで！」A児の泥だんごは全く割れることなく築

**認める・共感する**
・もっとつくりたいという気持ちをもてるようにする。
・子どもたちが満足感を感じられるようにしたい。

山の上から下まで勢いよく転がっていった。続いてＢ児、Ｃ児もやってみると、次も割れずに下まで転がっていった。
Ｂ児「下まで転がった。ヤッター！」Ｃ児「僕らの泥だんご固いから全然割れないねんで」Ⓣ「すごい！全然割れないね！」「すごく固いだんごできたね！」と言って割れずに下まで転がったことを一緒に喜んだ。
続けて、保育者がつくった、少し水分が多くてやわらかい泥だんごを上から転がしてみた。しかし全く転がらず、途中で止まってしまった。Ⓣ「あれ？なんで先生のだんご転がらないんだろう？」と問いかけてみると、Ａ児「先生のは重いからやで」Ｂ児「べちゃべちゃやから転がらないねん」と、どのような泥だんごが転がりやすいか気付き、保育者に得意げに伝えた。Ⓣ「なるほど！みんなよく知ってるね！」と言うと、とてもうれしそうにし、「だって泥だんご名人やもん！」と言って、また何度も泥だんごを転がして遊んだ。

**提案する**
・やわらかい泥だんごだとどうなるかということに関心を持って見てほしい。
・やわらかい泥だんごはどうして転がらないのか子どもたちに考えてほしい。

**認める・共感する**
・子どもたちに、満足感ともっとしたいという気持ちを持ってほしい。

カチカチの泥だんごできたよ！！

見て！ぼくの泥だんご割れないで下まで転がった！

【考察】
・固い泥だんごは割れないということが分かり、新しい遊び方を子どもたちが自ら考え出した。
・新しい遊び方を保育者が認めたこと、また保育者がつくった泥だんごは転がらなかったが、自分たちの泥だんごは割れずに転がったという満足感から、もっと固い泥だんごをつくって、もっとたくさん遊びたいという気持ちを持つことができた。

## 事例２「お部屋でダンゴムシを飼いたい！」　４～７月

進級当初から、ダンゴムシ探しに熱心な子どもたちが多くいた。
プランターや石などの下にいることを知っていて、保育者に持ち上げてほしいと伝えてきたり、自分たちで持ち上げたりして探していた。「ここには、おらへん。あっちの下はどうかな」「暗いところが好きなのかな」と、一人一人がつぶやきながら探している。
見つけたダンゴムシをうれしそうに見つめながら
Ａ児が「ほし組の部屋でダンゴムシ飼いたい。」と伝えてきた。
Ⓣ「そうだね。みんなにも話をしてみようか！」と提案した。
クラス全体で話すと、ごはんは「草をたくさん入れてあげる」「いちごをあげる」、園庭のダンゴムシのいた場所から「土を入れてあげる」、「のど乾くかもしれないから、水もあげなあかん」と、いろいろな思いや考えがでてきた。
Ⓣ「そうだね、みんなと同じで生きているものね。ごはんも食べるし、水も飲むね。」
Ａ児「じゃあ、ウンチもするね！」と、自分たちと同じを子どもたちなりに感じていた。保育者は笑顔で頷きながら、子どもたちの思いを受け止めていた。
友達の話を聞きながら、虫が苦手なＨ児は触ってみたいけれど、じっと見つめてもう一歩がでない様子であった。

**環境構成**
ダンゴムシ探しやダンゴムシの話をする時間を十分に確保することで興味を持ってほしい。

**提案する**
クラスで飼いたいという思いを共通理解し、飼うことをみんなに知ってほしい。

**認める・共感する**
・気付いたことや考えたことを、伝えられる楽しさを感じてほしい。
・ダンゴムシに興味を持ってほしい。

**見守る**
子どもたち自身が考えたことをのびのびと表現してほしい。

ここにいるかな？

プランターの下にいたよ！

ダンゴムシがいっぱいいる！

【考察】

クラスで共通理解したり、子どもたちの言葉に共感したりしたことで、身近な生き物に興味を持って、気付いたことや思ったことをのびのびと伝える姿が見られた。また、環境構成として、探す時間や話をする時間を十分に確保することで、落ち着いた雰囲気の中で、ダンゴムシのいそうな場所を友達と一緒に探してみたり、「ごはんをどうするか」や「土を入れてあげる」など、一人一人がダンゴムシのことを考えることができた。

**「ダンゴムシって、こしょばい！」**

**絵本を飼育ケースの近くに置いたり、飼育ケースと保育者がつくったダンゴムシの特徴を書いたものを廊下に掲示したりした。**

絵本や特徴を書いたものを見て、「ダンゴムシの足っていっぱいあるねんな！」お腹のところを指さしながら「ここが白いのは、卵らしい」「背中には、模様があるよ！」と、動く実物とは違う、絵本の中のダンゴムシの図を見て驚くようであった。

また、「石食べるの？」や前にあげたイチゴのことを思い出して「イチゴは、かじっていたな」と、実際に起きたことと、絵本の内容を見比べていた。

虫が苦手なH児は絵本をじっと見ながら「ロ、こんな形なんだ…」と、つぶやいていた。少しずつ興味を持ち、自分から動き出している姿が見られた。

絵本をダンゴムシのところに持って行き、手にダンゴムシをのせて、見比べるY児。

A児「このダンゴムシの背中、ぽつぽつの模様あるから、女の子やな」と、絵本で見たことをダンゴムシと見比べていた。

B児「ほんまや、綺麗な色やなぁ」と、真剣な顔をしている。

絵本を覗き込みながら

C児「男の子は、何も模様ないの？」

A児「ないみたい！絵本に書いてある！」

B児「女の子やから・・・卵持っているかな？」と、ダンゴムシを裏返して見つめる。

B児「あ！！お腹のところ白い！見てみて！ここ！」と、興奮気味に伝える。

C児「ほんまや！赤ちゃん生まれるなぁ！」

A児「赤ちゃんはこんなに小さいねんて」と、絵本の中の白い小さな赤ちゃんを見せた。「楽しみやなぁ」と、他児にも伝えながら、楽しみにする様子であった。

また、B児「足、こしょばい！」と、ダンゴムシを手にのせながら、くすぐったそうに伝えてきた。

保育者もダンゴムシを手に取って「本当だね、こしょばいね！」と感じたことを受け止め、共感した。

C児「裏返しても落ちないよ！」

Ⓣ「すごい！くっついているみたい！」と、足が多くてくすぐったいことやダンゴムシが逆さになっても落ちないことを触る中で感じていた。

**環境構成**

- 子どもたちが飼いたいと思う気持ちを実現させたい。
- 身近に見て触れてほしい。
- ダンゴムシの生態に興味を持ってほしい。
- 苦手な子どもたちも興味を持ってほしい。

**見守る**

子どもたちが興味を持ってダンゴムシの生態を見て、生き物を身近に感じてほしい。

**見守る**

友達とのかかわりをひろげてほしい。

**見守る**

友達同士で自分の思ったことや感じたことを自分の言葉で伝えてほしい。

**認める・共感する**

感じたことや思いを受け止めたい。

【考察】
身近にダンゴムシを見たり、触れたりできる環境があることで、絵本などと見比べてみたり、思ったことを友達同士のびのびと伝え合ったりする姿が見られた。また、動く実物とは違う絵本や掲示物から、ダンゴムシに興味を持ったり、生態を知ったり、積極的にダンゴムシにかかわる姿が見られた。また、手にのせた時のくすぐったさを感じたことに保育者が共感したことで、一人一人が実感できた体験につながったと感じた。

**「ああ！ダンゴムシの赤ちゃんいた！」**

毎朝、登園して必ずダンゴムシが元気かどうかを確認するA児。メスのダンゴムシが卵を持っていることをクラスでも話をしていたので、そのことについても気になっている様子である。
「おはよう！」と、ダンゴムシに声をかけながら、じっと見つめる。
Ⓣ「ダンゴムシさん元気そう？」
A児「まだ、動いてない。寝ているのかな」と、じっと見つめる。
A児「ああ！！！ダンゴムシの赤ちゃんいた！先生、ここ！！」と、発見したことを大きな声で勢いよく伝えてきた。
**Ⓣ「本当や！こんなに小さいのに、Aくん、よく見つけたね！」と、隣で頷きながら、共感する。**
A児「ちっちゃいなぁ」と、まじまじと見つめていた。
その後もA児は、登園してきた友達に赤ちゃんがいることを得意げに伝えていた。
他児もうれしそうに「可愛い～めっちゃ小さい！」「大人と色が違うね、透明みたい！」と、思い思いに感じたことをつぶやいていた。
登園してきたH児。
A児「赤ちゃんが生まれているよ、ここ！」と、指をさながら伝える。じっと見つめてH児「ほんとや、可愛い」と、言葉数は多くないがH児は、微笑んで見つめていた。

また別の日、H子は、友達が触っている様子を見ながら、近くに寄ってきた。
**Ⓣ「触ってみる？」**
H児「うん」と、手を出した上にダンゴムシをのせると、はじめはぎこちなかった表情が少しずつ笑顔になった。小さい声で
H児「こちょばい」
**Ⓣ「こちょばそうだね！」**と、つぶやき、手にのせたダンゴムシを友達に見せ「めちゃくちゃこちょばいね」と、感じたことを素直に伝えていた。

1学期間、見たり触れたりしたなかで、ダンゴムシが下に落ちてしまって「痛かったね、大丈夫？」と、心配する声も聞かれるようになった。また、死んでしまったダンゴムシをそっと手にのせて、「土のところにかえしてあげる」と、友達と二人で土のところに返してあげていた。一人一人が身近な生き物に対しての思いやりの姿が見られた。

**認める・共感する**
・よく見ないと見つけられないすごさを感じてほしい。
・発見した感動を実感してほしい。

**見守る**
興味を持ったことに対して、自分からかかわっていってほしい。

**提案する**
興味を持って自分から触ろうとしている気持ちを行動にしてほしい。

**認める・共感する**
触れたことを喜んでほしい。実感してほしい。

【考察】

・小さくて見つけるのが難しいけれど、卵からいつ生まれるのかを本当に楽しみにして、毎日、見続けたからこそ、赤ちゃんが見えたのだと感じた。

・保育者の「本当や！」や「触ってみる？」など、言葉数は多くはないけれど、子どもたちのその時の思いに寄り添うことで、くすぐったいことなどを実感し、友達にも知らせたいという気持ちに繋がったのだと思う。

# ５歳児

こんなだんごがつくりたい！

## 事例１　光る泥だんごづくりに挑戦　４～６月

砂場でだんごづくりをしていた子どもたち。保育室に置いてあった、保育者のつくった光る泥だんごを見て「こんなのつくりたい」「やってみたい」と興味を示し、さっそく友達と挑戦する姿が見られる。

はじめは砂場の“砂”でだんごをつくろうとするが、ぎゅっとにぎっても固まらない。自分たちでだんごをつくりやすい“泥”“土”を園庭のあちこちを探し、築山の土が粘土質で一番つくりやすいことに気付く。「水、流してちょっとやわらかくしてからつくるねんで」「固くにぎって丸くするねん」と、友達同士で話しながらつくる。互いに考えを出し合う子どもたちと共に、保育者も子どもたちの考えた方法を試しながら一緒にだんごづくりをする。

**環境構成**

泥や土の不思議や面白さを感じて欲しい。

**見守る**

自分たちで考えを出し合い、いろいろな方法を試しながら光る泥だんごづくりのコツをつかんでほしい。

保育室前の廊下に、『光る泥だんごの作り方』と、つくった泥だんごを置くスペースを用意する。

「明日も続きしよう」「頑張ってピカピカだんごにするぞ」と、つくっただんごをビニール袋に入れて休ませ、翌日も続けて取り組んでいる。

泥だんごづくりの過程の中で、さら砂をかけていく作業では、天候によって「全然さらさらじゃないな」「昨日、雨降ったからやな」と、砂や土が湿っていることに気付き、「いいところを見つけたよ」と、雨には濡れていない小屋の中の土を使うなど工夫をしている。

**環境構成**

目標に向かって根気よく、光る泥だんごづくりに続けて取り組めるようにしたい。

だんごづくりには、ここの土が一番いいねんで！！

ある日、A児のつくっただんごが白く固まっていた。「めっちゃ固い」「石みたいやな」と、友達同士で見せ合う。遊びの後の話し合いでA児のつくっただんごを取り上げ、Ⓣ「だんごの色変わってんて。なんでやろう？」と問いかけると、「乾いたからやで」と、子どもたち。Ⓣ「乾くってどういうこと？」と聞くと、少し考え、「水がだんごの中に入っていったんちゃう」という説と、「水は外に出ていった」説が子どもたちの中から出てくる。B児が「だんごが濡れてないってことは、水が出ていったんやと思う」と考えを述べると、周りの幼児も「確かに！」「お水、飛んでいってるんかもな」「風にのっていったんかもな」と、賛同していた。

後日、ビニール袋に入れていたB児がつくっただんごを見ると、ビニール袋に水滴がついていた。保育者がB児にそのことを伝えると「あ！水出てる」「やっぱり水はだんごから出ていったんやな」と、クラスのみんなで話し合ったことを目で見て実感する。「見て！水出ていったよ」と、周りの友達にその様子を伝える。水の蒸発“乾く”ということを目で見て感じることができた。

**提案する**

一人の気付きをみんなで共有し、クラスのみんなで泥の性質、“乾く”ということについて考えたい。

**提案する**

蒸発の様子を実際に自分の目で見て感じて欲しい。

【考察】

保育者のつくった光る泥だんごを見て、自分たちも同じようにつくりたいと意欲的に取り組む姿があった。一緒に遊び、それぞれがだんごづくりに適した土を探したり、何日も継続して取り組んだりと試行錯誤している姿を見守りながら、泥の特性やつくりかたのコツを提案することで、友達同士で考えを出し合い、天候によってさら砂の場所を考えたり、場所によって砂や土の性質が違うことに気付いたりすることができた。A児のだんごを遊びの後の話し合いで取り上げたことで、泥だんごづくりの中で、“光る泥だんごをつくる”という目的以外にも、“水の蒸発”という新たな視点をクラスのみんなが持つことができた。

## 事例２　フルーチェの泡と納豆の泡　６月

削った石鹸に少しずつ水を加えたり、たくさんの水の中に直接石鹸を入れて混ぜたり、泡のつくり方、楽しみ方はそれぞれである。**保育者も一緒に遊ぶ中で、子どもの考えた方法を一緒に試したり、気付きに共感したりする。**A児は昨年度の経験から「ボウルをひっくり返しても落ちない泡をつくりたい」と、削った石鹸に水を少しずつ加え、慎重に泡をつくっている。クラスで一番に落ちない泡をつくり、話し合いの場で得意げに友達や保育者につくった泡を見せる。

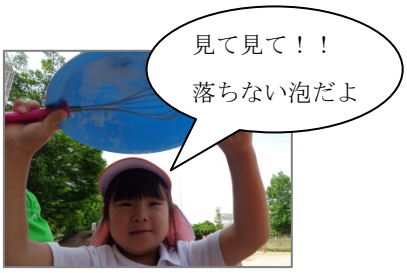
A児の姿に刺激を受け、B児も「落ちない泡をつくりたい」と、自分なりに試行錯誤をしながら泡をつくる。A児の泡と自分の泡を比べながら、「こっちは（A児がつくった泡）フルーチェの泡や（ふわふわでボウルをひっくり返しても落ちない泡）」「こっちは（B児がつくった泡）納豆の泡や（ねばねばでボウルをひっくり返すと流れ落ちてしまう泡）」と、それぞれの泡の違いを身近なものに例えて表現する。**保育者はB児の気付きに共感し、一緒に泡の違いについて考える。**

**B児にⓉ「どうすればフルーチェの泡ができるか、みんなに相談してみようか」と提案し、話し合いの場でB児の気付きをクラスのみんなで共有する。**「フルーチェの泡は固まるけど、納豆の泡は固まらへんねん」と、気付いたことをみんなに自信を持って話す。Ⓣ「Bくん、みんなに相談したいことがあるんだって」と、B児の泡を見せながら、どうすれば落ちない泡をつくることができるのかを、B児と共にクラスのみんなに問いかける。B児の話を聞いていた他の幼児が、「フルーチェの泡は水ちょっとで石鹸いっぱい」「早く混ぜなあかんねんで」と、それぞれの経験をもとにした考えを伝え合う。

翌日、「水ちょっとで石鹸いっぱいって言ってたな」「これぐらいかな」と石鹸や水の量を調節しながら、話し合いで友達に教えてもらった方法でフルーチェの泡を完成させるB児。「やっと、できた」と喜んで友達や保育者に見せる。**B児や周りの幼児と共に、泡ができたことを一緒に喜ぶ。**

**認める・共感する**

一人一人が自分なりに試したり工夫したりする姿や過程、それぞれの楽しみ方を大切にしたい。




**認める・共感する**

B児の素直な表現を受け止め、一緒に泡の特性を考えたい。

**提案する**

B児の気付きや考えを周りの幼児に伝え、クラス全体で落ちない泡をつくるための条件を考えたい。

**認める・共感する**

試行錯誤しながら理想の泡をつくったB児の姿を認めたい。

【考察】
友達の姿が刺激となり、自分もやってみたいという意欲を持ったＢ児が、試行錯誤をしながらじっくりと取り組む姿を見守りながら、保育者が共に遊ぶ中で考えや気付きを受け止め、クラスのみんなで泡の性質について考えたりしたことで、Ｂ児は理想の泡をつくることができた。保育者がすぐに答えを出すのではなく、友達同士で考える機会や場を持つことが、自分たちで問題解決をしていく姿につながると考える。

## 事例３　いかだプロジェクト

5 月　タライに乗ってみよう！

砂場で大きな山を作ったり、海を作ったりして遊んでいた。「だんだん海が広くなってきたね！」と声をかけ、子どもたちの様子をそばで見守る。子どもが海に水を流し入れ、砂型やスコップなど砂場の用具をありったけ海に浮かべて遊んでいた。
子どもが近くに置いてあったタライを海に浮かべる。「乗ってみてもいい？」と保育者に聞く。「もちろんいいよ」と頷き子どもの様子を見守る。「よし！」と勢いよく飛び乗ると「うわ！」と少し揺れたことに驚き、自分で体を揺すって動かそうとする。
　しばらくすると「一緒に乗ってみようよ！」と友達と二人で乗ったり、スコップを持ってきてオールに見立ててこいだりする姿が出てきた。何度か試していると「ちょっと、降りてほしいんやけど…」「全然進まへん！」「下にあたってる」など、思っているように動かないことに気付き始める。「先生、明日もタライの遊びしたいからこのままにしときたい！」と子どもたちから声が上がったので、つくった山と海をそのままにしておくことにした。

認める・共感する
・子どもたちに思う存分遊んでほしい。
・大きな山と海をつくろうとする目的を大切にしたい。

見守る
子どもが試したいと思ったことを試させたい。

環境構成
次の日も継続して遊んだり経験したりしてほしい。

【考察】
友達と協力して山や海をつくるという目的がはっきりし始めてきた。目的に向かって友達と協力する姿を見守ることで、子どもが思いを存分に出して遊ぶ姿につながった。また、子どもがタライに乗ってみたいと思ったことを認め、その様子を見守ることでタライに乗って浮きたいという遊びの目的に変わっていった。

5 月　昨日の続きがしたいけど・・・

翌日、砂場に行ってみると、溜めていた水が少なくなっていたところに、おもむろにタライを置くが、前日のようにプカプカと浮かばない。「深く掘ろうよ！」と友達同士で誘いかけ、海を深く掘り始めた。また、そばでその様子を見ていた他の子どもたちも「水入れないとアカンな！」と砂場のポンプにホースをつなぎ、さらにトイをつないで、水の流れるコースを自分たちで作り始める。「ビールケースを持ってくるわ！」「だんだん高さを変えた方がいいよ！」と高低差をつけて、水の流れをつくっていった。

見守る
前日の続きをするために、子どもたち自身が考えを巡らせ、どうするかを考えてほしい。

【考察】
翌日も「タライに乗って遊びたい」という思いが強かった。遊びの場を子どもの思いに沿ってそのままにしておくことで、子ども自身が考える機会や友達と話す機会を持つことが出来た。また、子どもが考えて動き始めたことを見守ることで、これまでの経験を思い出し、トイやビールケースを使ってコースをつくり自分たちで遊びを進めていく姿につながった。

6 月　いかだつくろう！

１週間以上タライに乗って遊んだが、タライに乗るだけの遊びに飽きてきている様子であった。そこで、直径 1m ほどの円形ですり鉢状になったプラスチックの素材とペットボトル、牛乳パックを５つつないだものを遊びの場の近くに置いておいた。
プラスチック製の蓋は３人４人で一緒に乗って、「見て見て！めっちゃ波出る！」と揺らすと波が出ることに気付いた。「ほんと

環境構成
・タライのほかにも浮くものがあることに気付き試してほしい。
・浮くものを自分たちでつくるという遊びを考えてほしい。

やね！すっごい揺れてるな！」と声をかけた。子どもたちは数人で乗り、足で力を入れて波を起こすことを楽しんでいた。
　ペットボトルや牛乳パックをつないだものを浮かべ、そこに乗ってみる。A児が「あれ？これ乗ったら浮かばないよ…」とキョトンとしていた。その場にいた数人を集めて、どうしたら浮かぶかを考えた。「もっともっといっぱいつなげたらいいん違う？」「いっぱいにして広くしたらいけそうやな」「それって何かいかだみたいやな！」「いかだって何なん？」「木の丸太使って作る船みたいなものや！」「いかだ作ろう！！」といかだづくりが始まった。

**認める・共感する**

浮くことだけでなく、波を起こすことに気付いたことを一緒に喜びたい。

**提案する**

一人の気付きを共有し、友達と考えを出し合って新しい遊びを創りだしてほしい。

**【考察】**

１週間以上タライに乗って遊んでおり、だんだんとその場から子どもが離れていっていた。他にも浮くものがあることや、浮かぶものを自分たちでつくってほしいと考え、新しく素材を出しておいた。タライのときとは違い、激しく波を打って遊ぶ姿が見られたり、浮かばないからどうしたら浮かぶかを考えたりするきっかけとなり、さらにいかだを自分たちでつくるという新しい発想に持つながった。

6 月　いかだ１号

いかだづくりのために牛乳パックやペットボトル、布テープ、ビニールテープを用意しておいた。
　子どもたちはたくさんあった牛乳パックを選び、縦と横をきっちりと揃えたり、「もっともっと広くしよう！」とどんどんつなげていったりした。「裏もしっかりと止めとかないとな！」と友達と顔を見合わせて協力しながら進めていく。保育者もそばで「だんだん広くなってきたよ！」「あと少しだね！」と声をかける。
　完成したいかだをうれしそうに持っていき浮かべてみると、スーッと進み「やった！浮かんだな！」友達と喜んだ。しかし乗ってみてすぐに「なんか全然進まなくなってきた！」と不満げな表情の子どもたちを見て、保育者は「いったん持ち上げてみたら？」と声を掛ける。すると「めっちゃ重くなってる！！！」と子どもたち。「え？なんでかな？なんでかな？」と子どもたちに尋ねると、「水が入ってるん違う？」といかだを左右に動かしてみるとジャボジャボと水の入っている音が聞こえた。「ほんまや！水が入ったら浮かばへんやん」と口々に原因を友達と話す。
　遊びの後の話し合いでは問題が発生したことを取り上げると「牛乳パックの絵が見えなくなるまでガムテープを貼ったらいい！」「そしたら絶対に水入らない！」と水が入らない方法をみんなで考えた。

**環境構成**

子どもたちのいかだをつくりたい思いを実現させたい。

**認める・共感する**

子どもがやってきたことを認め励ますことで、自信を持って活動に取り組んでほしい。

**提案する**

・原因を子どもなりに探り、自分たちで解決方法を探ってほしい。
・水が入り重くなると浮かなくなることに気付いてほしい。

**【考察】**

子どもが自分たちで考え、していることをありのまま認めることで、子どもたちは主体的に遊びを進めていくことが出来た。また、いかだが浮かなかったタイミングで、どうしてうまくいかなかったのかを子どもたちに問題を投げかけたことで、子どもたちは牛乳パックに水が入り、重くなると浮かばないということに気が付いた。ここでは答えを教えるのではなく、保育者も一緒になって、なぜ浮かばなかったのかをとことん考えたことで、次に自分たちがいかだをつくるときには、どんなことに気を付けるかまで話し合うことが出来た。

6月　いかだ２号

いかだ１号をつくっているときとは違い、子どもたちはつなげていくことに加えて、牛乳パックに水が入らないように気を付けながらガムテープを巻いていく。「そこまだ絵消えてないよ！」「ここもまだやから貼って！」と友達と声を掛けながらつけていく。「こんなのもあるけど」とペットボトルを見せる。「ペットボトルもつなげてみよう！」「牛乳パックの下につけよう！」と子どもたちはペットボトルにもしっかりとキャップをして、牛乳パックの下に取り付けた。

今度こそ絶対に浮かぶと自信満々の子どもたちはいかだを浮かべて水面をスイスイと進み、裏返してみたり、二人で乗ったりを繰り返した。しかし、今回もだんだんと進みが悪くなり、子どもたちが恐る恐る持ち上げてみると「また重くなってる」「テープでぐるぐる巻きにしたのに、なんでかな」と、とても残念そうな表情だった。

その日の遊びの後の話し合いでは、「また水が入ってしまって浮かなくなった…」と他の友達にも伝えた。**保育者が「ペットボトルにも水は入ったのかな？」と尋ねる**と、「ペットボトルには入ってないな！」「なんで入ってないってわかるの？」「だって透明やから見えるやん！」「いかだ３号はペットボトルでつくろう！」「ペットボトルやったら絶対に大丈夫や！」と確信し、ペットボトルを使っていかだ３号をつくることになった。

牛乳パックの絵が見えなくなるまで貼ろう！！

**提案する**

ペットボトルだと水が入ったかどうかを目で見て確かめられると考え、新しい素材を提案した。

**提案する**

ペットボトルには絶対に水が入らないことに気付いてほしい。

**【考察】**

子どもの思いに沿って、認めたり共感したりしていくことに加えて、保育者が新しい気付きを促すためにペットボトルのような違った素材を提案した。その提案を受け入れるかは子ども次第であるが、この事例では受け入れたことで子どもがペットボトルに水は絶対に入らないことに気付き、問題解決の糸口を見出すきっかけとなった。子どもにとって新しい気付きを、意図して保育者が提案していくことで、気付きが広がり新たな活動を生み出していった。

6月　いかだ３号

いかだ３号づくりでは、組み合わせていくのは慣れた作業で、「ペットボトルの底同士をくっつけた方がくっつけやすいからそうしよ！」「キャップのところもビニールテープで止めたら水入らへん！」とペットボトルの形の特徴をつかみながら組み合わせていく。「こうやって寝ても乗れる！ベッドみたい！」と完成したいかだに乗って試したり、「絶対に浮かぶよな！」と友達と笑顔で顔を見合わせる。その様子を見て保育者も「**今回はきっと浮かぶよ！」と声を掛ける**。

「いかだ３号が通ります！」と自信作を持ち、意気揚々と園庭を横切り、海まで運ぶ。いかだに乗ろうとすると「うわあ！！」と、バランスを崩し驚く。次は慎重に足をのせると「すごい！浮いた！」「やったー！」と大興奮の様子で立ったまま体を捻らせたり、体重移動をしながら自分で動かそうとしたり、「寝てみよう！」と部屋で試していた乗り方を試したり、「二人乗りしよ！」「二人でも浮くな！」「やっと浮いたな！めっちゃすごい！」と大喜びの子どもたちだった。**保育者もそばでいろいろなことを試す子どもたちを見守り、成功を一緒に喜んだ。**

**認める・共感する**

いかだを浮かばせることにより期待感を持ってほしい。

**見守る**

子どもたちの達成感、充実感を十分に認め、保育者も感動を共有したい。

二人乗りもできたー！！

**【考察】**

何度も失敗を繰り返し試してきている子どもたち、次は浮かぶだろうかと期待と不安をもちながら遊んでいる。保育者がその気持ちを読み取り、絶えず見守りながら励ますことで、子どもたちが自信を持ってより意欲的に遊ぶ姿につながる。また、諦めずに失敗をもとに挑戦し続けてきた子どもたちの喜びや感動を保育者自身も共有することで、子どもたちはより達成感、充実感を得ることが出来た。

６月中旬は雨が振り続けたこともあり、思うようにプール遊びが出来なかった。プール遊びの中で、自分の体が浮くことや、ウレタンマットに乗って遊んだり、ビート板で浮く経験をしたりすることを積み重ね、子どもたちからプールでいかだを浮かべたいと発信してきてほしかったが、十分にそのような経験が出来なかった。そこで、プールという広い場で、より浮かぶという経験をさせたいと願い保育者から子どもたちに投げかけた。

**７月　プールに浮かべるいかだをつくろう！**

「**もっと広いところで浮かべられないかな？」と子どもに投げかける**と、「もっと砂場を広くする…？」「でも泥水で汚れるよ…」と考えを巡らせる。「**プールでは浮かべられないのかな…？」と提案する**と、「なるほど！プールやったら広いし、きれいな水やん！」「プールで浮かべたい！」と、プールに浮かべるいかだづくりが始まった。

次の日、「先生！インターネット使っていかだの作り方調べてみたけど！」といかだの作り方を調べてきた子どもがいた。「**お！すごいね！調べてきたんだ！みんなにも知らせよう！」**と保育室に行き、**画用紙に貼り付け、全員が見ることが出来るように掲示した。**その日の話し合いで、ペットボトルを３段に重ねた作り方が載っていたことを全員で共有し、３段重ねのいかだを作ることに決定した。

**提案する**

プール遊びにつなげ、もっと浮くことを試してほしい。

**認める・共感する**

自分で調べてきたことに自信を持ってほしい。

**環境構成**

子どもが調べてきたことをクラス全員で共有したい。

**【考察】**

砂場でのいかだ遊びから、しばらく期間があった。プールという新しい場を提案することで、遊びを思い出し、さらにインターネットを使い調べてくる子どももいた。調べてきたことを全員で共通に理解できるように、保育者が掲示物を用意したことでクラスでの共有ができ、プールに浮かべるいかだをどうやってつくるかを話し合うきっかけにもなった。

ペットボトル３段重ねだって！

**７月　プールにいかだを浮かべよう！**

「一人乗り用って書いてるから先ずは一人ずつ乗ろう！」と話し合い、プールにいかだを運ぶ。一人目が乗ると「うわあ！！浮いたー！」と全員で感動を共有した。友達に押してもらうとスイスイ進んでいくいかだ！！いかだの上でバランスをとりながらうまく乗る。「二人でも乗れるんじゃない？」と何人かが乗り始め、３人乗り、４人乗りと人数を増やしていく。「一人乗り用やったのに４人まで乗れたね！」と大喜びの子どもたちだった。また、いかだを浮かべている様子を３、４歳児も見に来た。「すごいな！」「乗ってみたいな」と声を掛けられることで、子どもたちはさらに満足感・達成感を得ることが出来た。

すごい！
浮かんだ！！！

漕いだら少しだけ進むね！！

めっちゃ気持ちいい！

【考察】

子どもたちは、失敗しても諦めずに何とか成功させようと、試行錯誤を繰り返した。子どもの思いに寄り添いながら子どもがやってみたいと思うことを認め、見守ることで子ども自身が気付き発見することが多くあった。また、時に保育者から気付きを促す提案や、疑問を投げかけることで、新たな活動へとつながっていくこともわかった。何度も失敗を繰り返す中で、子どもたちは新たなことに気付き、友達と協力して問題を解決し、小さな成功体験を積み重ねることで、大きな充実感・満足感を得ていくことが分かった。

4　まとめと課題

○ 保育者の意図は年齢により異なることが分かり、援助の内容を分析すると『見守る』『認める・共感する』『提案する』の大きく３つになると考えた。保育者は意図を持ち援助や環境構成をするが、決して意図した方向に向くように指導するのではなく子どもとともに活動し、ともに考えることを大切にしてきた。

○ 3 歳児は、子どもの目につきやすい場に置く事、保育者が常に子どもたちに寄り添うことで、子どもが安心して自分を発揮し、意欲を持ち、次の発見につながり、試してみようとすることが分かった。周囲の様々な環境に対して子どもがアプローチしようとする背景には、保育者の存在が心のよりどころとなり、安心感を持つということがベースになっている。

○ 4 歳児は、いつでも見られる、触れる、調べられる環境を継続して設定すること、保育者が傍で見守ったり認めたり共感したりすること、子どもの気付きや思いを受け止める援助を積み重ねたことにより、子どもたちの興味や関心が広がっていき、もっと知りたい、もっとかかわりたいという意欲につながった。そして、継続して取り組んでいるからこその大発見を経験し、愛情を持って生き物にかかわるようになり、大切に思う気持ちが育まれた。また、以前の経験や 5 歳児の姿が刺激やヒントになって自分たちの思いを実現させていくことにつながった。じっくりと試せる時間や場があることで、試行錯誤を繰り返し、自分達で遊びを創り出していった。結果を推測し、試してみる姿も見られ、保育者がその姿を見守ることで次の遊びが生まれることが分かった。

○ 5 歳児は、一つのものから想像力を働かせ、やってみたい思いに駆られたとき、保育者が背中を押すことで子どもが思いを実現させようと立ち向かうことができると考える。

・保育者は子どもたちが考え試しながら遊ぶ中で、うまくいかなかったり壁にぶち当たったりしたときこそチャンスととらえ、大切にしてきた。そこには、子どもの試行錯誤にとことん付き合う保育者の援助が欠かせない。そして、タイミングを見計らって保育者による目新しい物を提示、きっかけとなる言葉がけで、諦めることなく困難を乗り越え、新たな遊びを創りだすことにつながった。

・家庭での生活経験から、インターネットの情報により調べたことを遊びに活かそうとする子どもの行動を保育者がタイミングよく取り上げ、クラス全体で共有したことで子どもたちの思考力、判断力、行動力を育むことに繋がり、クラス全体が一致団結してひとつの目標に向かって協力することで、成功体験ができクラスの絆が深まった。

・様々なものにかかわる経験を継続することができるよう十分に時間の確保をしてきたことによって、ものの性質や自然のメカニズムに気付き不思議に思ったことを深く探究し試行錯誤を繰り返すことで、科学的なものの見方、考え方が育まれていき、新たな遊びを創りだしていくことが分かった。

・泡遊びでは友達の姿が刺激となり、自分もやってみたいという意欲を持ち、目標に向かって試行錯誤するようになる。子どもたちの試行錯誤する姿を見守り励ます保育者の援助により、友達に方法を教えてもらいながらも自分で試すことを繰り返し、自分の力で目標を達成することができ、課題を克服する力が育まれ、大きな喜び、満足感、達成感を味わい、自信につながることが分かった。

○ 課題としては「科学する心」を学びの芽生えとして見取り、子どもたちが心も体も頭も存分に使って遊ぶ環境づくり、援助を今後も継続していきたい。

研究代表　杉本絹子
研究者　高尾美咲　播本洋美　鎌田大雅　藤本佳那　村上佳奈
山中裕美子　米原万紀子　松石洋子　熊木美菜